

心配と不快体験

目 次

闇の世界を持たない成長のスタイル	深谷昌志	2
〔調査レポート〕心配と不快体験		
要約		5
はじめに		6
1. 子どもにとってのショック体験・不快体験		10
●毎日の暮らし		13
●ショック体験		18
●不快体験の感じ方		21
2. 学校はつらいところか		30
●クラスの雰囲気		30
●学校の中での傷ついた体験		34
●学校で傷ついた体験と友人関係		37
3. 子どもの中の心配・不安		40
●子どもが抱えている心配		40
●ショック体験が引き起こすもの		42
4. 子どもの自己回復力		46
●いやなことがあったときの回復法		46
●家庭の安定感との関連で		49
●まとめて代えて		50
〔対談〕野外教育を考える.....		
飯田 稔 vs 深谷昌志		53
・文献紹介『森林を生かした野外教育』		61
資料1 調査票見本		67
資料2 学年・性別集計表		76

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

闇の世界を持たない

成長のスタイル

静岡大学教授

深谷昌志

家の中に闇があった

何年か前の春先に、飛騨の白川郷を訪ねたことがある。合掌造りの家の中に入っておどろいた。ガラス戸が入っていないので、紙の障子越しに冷たい外気が入ってくる。外気を避けようと雨戸を閉めると、部屋の中が真っ暗になる。つまり、寒さか暗さかのどちらかをがまんしなければならない構造である。

部屋に入ってみると煙たい。木を燃しているからだ。屋根につく虫から合掌造りを防ぐのに有効だと聞くが、なにしろ煙が目にしみる。もちろん、この煙が炊事や暖房のもとになるので、ここでも、煙たさをがまんして暖を取るか、煙たさを避けて寒さをしのぐかの選択になる。

寒くなく暑すぎることもなく、ほどよい気候なら住みよさそうだが、合掌造りの家での

暮らしはそれほど快適とは思えない。

東京の深川に、江戸時代の家並みを再現している博物館がある。それぞれの家は、その家の職業や家族構成を設定して、家具や炊事道具などの生活道具が置かれてある。というよりよさそうだが、家の中はこざっぱりしている。着物は浴衣が1枚壁に掛かっているくらいで箆箆はなく、食器はざるに入っているくらいの量で食器戸棚はない。早い話、家の中に何もないのである。

このところ、地域再生の手がかりとして、村の暮らしを再現しようという試みがなされている。そうしたところをみるにつけ、かつての暮らしが質素でつましいものであったことを感じる。当たり前のことだが、夜は暗く、冬は寒く、お金がないと食べるものがない。それが家庭だった。

個人的な思い出話を書かせてもらえるなら、第2次世界大戦中、農家に疎開していた。

その家のトイレは屋外にあった。冬の夜など、トイレに行こうとすると、外なので寒い。それに月明かりがないと、外は真っ暗闇で気持ち悪い。さらに、トイレの中に何か潜んでいるような気がして、戸を開けるのがなんとも怖かった。トイレに入ると、今度は外へ出ると何かがいそうで外が怖い。

そういえば、夜になるとねずみが天井を走り回っていたし、蛇やとかけ、やもりなどが家の軒下や窓のまわりを動き回っていた。それに、電気代が高かったのか、部屋の電気も暗く、闇が家の中にも漂っていた。

したがって、家の中にいても、なんとなく怖い感じがつきまわっていた。それにひきかえ、現代の家庭からは怖さが消えた。ごく標準的な家庭を考えてみよう。窓ガラスがあり、電気がついているのはいうまでもなく、家の中から暗いところが消えた。それに加え、テレビやCDがあり、冷蔵庫が置かれていて、いつでも冷たいものを飲める。もちろん、冷暖房の設備があって、快適な生活を過ごせる。暗さや闇に代わって、明るさや快適さが現代の家庭を支配している。

われわれが闇から解放され、こうした快適な暮らしを送れるようになったのは、この30年くらい前からであろう。家庭というと「家庭の団らん」とか「マイ・スイートホーム」などが連想され、幸せのシンボルのような感じを抱く。しかし、家庭の住み心地がよくなり、スイートホーム化したのはこうした居住環境の好転を背景としている。

したがって、おとなたちはガラス戸や電気のない暮らしはともかく、冷蔵庫や冷房のない暮らしは体験している。それだけに、現代の暮らしの快適さを理解できる。しかし、子どもたちは現在の状況の中で生まれているから、現代の環境が当たり前で、阪神大震災のようなことでもないと、停電や断水が起きることはないと思っている。

換言するなら、子どもたちは電気がつき、水道があり、冷蔵庫が機能し、テレビが楽しい番組を映すのが当然で、そうした意味では、

家庭の闇などを感じることもなしに毎日を過ごしている。

地域には無数の恐怖がある

闇があって怖いというのは家の中だけではない。ふたたび、個人的な体験になるが、子どもの頃、東京の下谷に生活していた。上野の駅前の地域である。そうした都会でも、夕方になると親たちから「遊んでいると、人さらいにさらわれるよ」と注意された。そして、実際に子どもたちは人さらいの恐怖を感じていた。子どもたちの中では「人気の少ないあの塀のあたりに人さらいがいた」とか、「勇ちゃんがさらわれそうになって逃げ帰った」とかのひそひそ話が交わされていた。

実際に子どもたちの間であちこちに通るのが危ないところがあり、子どもはそこを避けて通るのがつねであった。何しろ、「人さらいにさらわれるとサーカスに売られる」という噂が信じられており、子どもたちは身を護る行動をとるようにしていた。

そうした意味でいえば、『赤い蠟燭と人魚』や『注文の多い料理店』などの空想の世界が、現代の子では信じられないくらいの現実感を持って迫っていたのを思い起こす。

校区の中に不安や闇が存在するのであるから、校区外はまさに真っ暗闇の世界だった。子どもの頃、となりの校区の学校へ行き、校門で「〇〇学校ぼろ学校、よくよく見てもぼろ学校」と言っ、逃げ帰ってくるのはかなりの冒険だった。

校区から外へ足を踏み出すだけでも、ちょっとした緊張感の伴う冒険だった。そうした大冒険なので単独というわけにはいかない。何人かの遊び仲間を誘って、決行の日を決める。そして、恐怖心を払いのけ、思い切って走り始める。そして、息を潜め、十分に周囲を警戒しながら小走りとなりの学校の校門を目指す。なんとか校門にたどり着くと、「おんぼろ学校」とどなって、校区まで一目散に逃げ帰る。死ぬおもいで、校区にた

どり着き、ほっと安堵して、成果を仲間と話し合う。その日のうちに「あいつらはとなりの校区に殴り込みをかけたらしい」という噂が広まり、当人たちはちょっとしたヒーローになれる。

数年前、偶然かつてのとなりの校区の学校から講演を頼まれて、何十年ぶりにその地に足を踏み入れてみた。自宅のあったところからとなりの学校まで、直線距離で700メートル。歩いて7分とかならないところだ。しかし、子ども心にとなりの学校の門は何十里も先の遠さだったのを思い起こす。

なにしろ、校区の中にもそれぞれに遊び仲間の縄張りがあるので、うかつに他の領域に入ると、いじめられたりする。したがって、自分の家のまわりが安住の地だった。それでも、子どもにとっては校区内は自分の生活圏という感覚を持てた。しかし、校区外は危険に満ち満ちた異界だった。

情報化社会が子どもの世界を変えた

家の中に闇があり、地域に無数の恐怖があり、校区が自分の生活圏というのが、かつての子どもの世界だった。そうした成長の感じが子どもから消えたのはいつの頃からだろうか。

生活水準の向上が背景にあるのは確かだが、その中でも、テレビの普及の与えた影響が少なくないように思う。テレビを通して、よそ

の世界が映る。地域などという狭い世界でなく、日本はむろん、諸外国の街角の姿があるままに映る。そうになると、人さらいなどの入り込む余地はない。まして、新しい変わったできごとを伝えるテレビで報じていないのだから、トイレの側に幽霊が出没することなどあるはずがない感じになる。

テレビの出現は子どもの世界から闇や不安を消し飛ばし、すべてを白日の下にさらした。現代でも、学校の花子さん怪談のように、子どもの中に怖い噂は浸透している。それに、こっくりさんも依然根強い支持を集めている。したがって、見えざるものや未知のものへの好奇心は、現在の子どもたちも持っているであろう。しかし、そうした未知のものはかつてと比べ極端に減少している。

まして、テレビゲームやCD、それにFAX、さらに携帯電話、パソコン、パソコン通信などが入りこんでくると、闇や未知などの非合理的なものの存在は否定される。そうした闇の世界を持たない現代の子の成長のスタイルは、明るくて好ましいように思う。でも、その反面、なにか大事なものをなくしてしまったような気がする。

あいまいな闇に包まれた不安な世界に身を置きながら、成長につれて闇のない明るい世界に視野を広げていく。それが子どもらしい成長のスタイルのように思うのは、過去にこだわりすぎた見方なのであろうか。

〔調査レポート〕

心配と不快体験

文教大学女子短期大学部助教授

石川 洋子

江戸川区教育研究所教育相談員

中原 美恵

東京学芸大学教授

深谷 和子



調査レポート

心配と不快体験

要約

● 調査概要

1. 調査主題 心配と不快体験
2. 調査視点 子どもたちがひ弱になってきたのは、豊かで快適な環境がもたらした結果ともいわれるが、本当に、子どもたちの生活の中から不快な体験やつらいことがなくなったのかを明らかにしようとした。
3. 調査項目 家庭やその周辺、学校などでの毎日の暮らしの中での不快な体験やショッキングなこと、その感じ方などについての項目を設定。
4. 調査時期 1994年11月～12月
5. 調査対象 東京・千葉・岐阜の公立小学校4・5・6年生
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査
7. サンプル数 1,951名

1. 子どもたちは毎日の生活の中で、不快やショッキングなことをどのくらい体験しているのだろうか。そしてそれをどう感じ、どう乗り越えていっているのだろうか。

調査対象は、東京・千葉・岐阜の小学4・5・6年生、1,951名、調査時期は1994年11月～12月であった。

2. 日常生活の中で、朝が「スッキリさわやか」と答えているのは1割で、9割は「少しぼんやり」、あるいは「眠くてボーッとしている」という。(表3)



3. 家の近所が「うるさい」「遊び場がない」「車が多くて危ない」という子がそれぞれ3割おり、都市環境を反映した数値となっているが、予想されたほどには不快感は高くない。(図6)

4. 家庭の中では、「親と一緒に遊んでくれない」49%、「勉強しろとうるさく言う」41%など、種々の不満も聞かれる。しかし、「親がすぐたたく」「怒ると出ていけと言う」などもそれぞれ2割いる。(図7)

5. 子どもたちは意外に多くのショッキングな体験をしている。「とてもこわい夢を見た」「仲よしの友だちとクラスが分かれた」などの体験がある子が8割に達している。また、体験の多さとは別に、その感じ方でショックが強いのは、「ペットや祖父母の死」など生死に関するもの、「1,000円落とした」などの経済的な損失、「親しい人との別れ」の体験などである。(図8)



6. 「体のことでからかわれたこと」が「何回もあった」子が39%、「仲のよい友だちから悪口を言われたこと」34%、「頭が悪いと言われたこと」24%などの不快な体験を訴える子も少なくないが、とくに友人関係に関する体験がとてつらいようである。(表4、図10)

7. ショッキングなことや不快な体験の感じ方は、女子の方が心に受ける傷が深い。また、学年が上がるにつれてショックを感じる度合いが減り、精神的な成長の様子がみられる。(図11~14、表5)

8. 快の体験をみると、「家族で泊まる旅行」が「とても・わりとうれしい」子が9割、「学校でのプールや遠足」も7割前後が「うれしい」としている。このような快の体験は、不快な体験を忘れさせ、あるいは和らげるものとなろう。(図15)

9. 学校で傷ついた体験が「あった」という子は、「授業中、笑われた」71%、「先生にひどく怒られた」65%など、かなりの割合に上る。また、30%の子が「みんなから、長い間いじめられた」深刻な体験をしており、その4分の3が「今でも思い出すとつらい」と答えている。(表7、図19)

10. 「友だちに嫌われるのではないかと、友人関係に不安を持っている子は39% (図21)。彼らは、学校で傷ついた体験が多く、いじめられ体験を「何回も持つ」子が42%もいる。(表8)



11. 学校生活での失敗場面への不安を「しょっちゅう・わりと」感じている子は、半数近くいる。地震災害や、親や自分が重い病気にかかることを不安に思う子ども2～3割。子どもたちの不安は決して小さいものではない。(図21)



12. ショック体験の多い子は、体験の少ない子に比べ、現在の生活の中での不安感が全般に大きい。周囲の人々との関係で傷つく体験に出会ったら、「とてもショックだろう」と予測する割合も高い。(図23・24)

13. いやなことを忘れるために、「友だちに話す」が37%、「親に話す」が30%。とくに女子は、この傾向が強い。また、「テレビやマンガを見る」42%、「ゲームを1人でする」28%で、男子は、もっぱらこの方法で回復を図っている。(図26・27)

14. 「親がよくケンカをする」と感じている子は、全般に不安感が高い。中でも、「自分が重い病気になるのではないか」と、健康に不安を感じている子が半数近くに上る。(図28)

15. 回復力に自信のある子とない子で差の大きな項目は、「小さなことは気にしない」で、前者では70%の子が「とてもそう」と答えている。さらに、「外遊びがとても好き」64%、「友だちがとても多い」51%と、自己回復力を支える要因がうかがえる。(図29)

はじめに

最近どの子どもたちも感じやすく、ひ弱になってきたといわれる。耐性がなく、快体験には積極的でも、不快体験には強く回避的だとされる。そういわれてみれば3Kとか5Kの仕事には、どんなに給料が高くて人も人が集まらないといわれて久しい。若者や子どもたちの、そうしたひ弱さを案ずるおとなたちも多い。それもこれも、豊かな時代の、快適で清潔な環境がもたらした結果ともいわれる。

子どもたちは今、そんなにも不快やショックやつらいことから離れた生活を送っている

のだろうか。ストレスはもう子どもには縁のないものとなってしまったのだろうか。そうした点を明らかにするために、子どもにとって快適でない体験、つまりショックあるいは不快と感じる体験を探るために、今回の調査を企画した。

調査対象の小学4・5・6年生、1,951名の内訳、きょうだい数、両親の職業などは、表1、図1～図4のとおりである。

表1 サンプル数

(人)

	4年	5年	6年	計
男子	308	340	311	959
女子	336	302	354	992
計	644	642	665	1,951

図1 きょうだい数

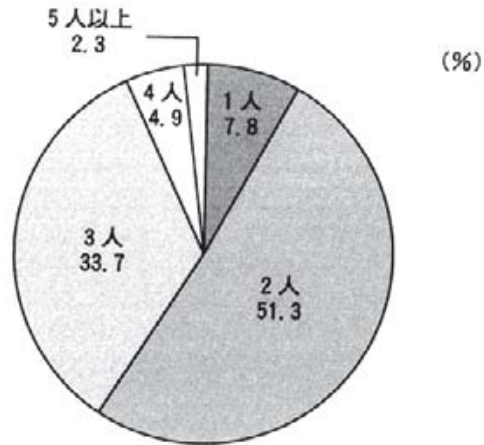


図2 一緒に住んでいる人

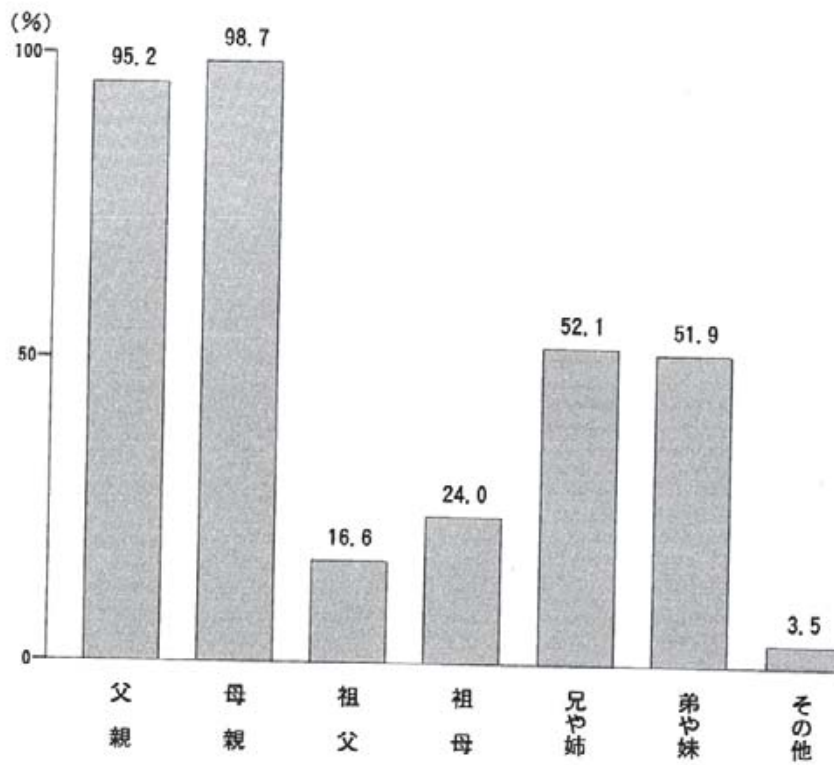


図3 父親の職業

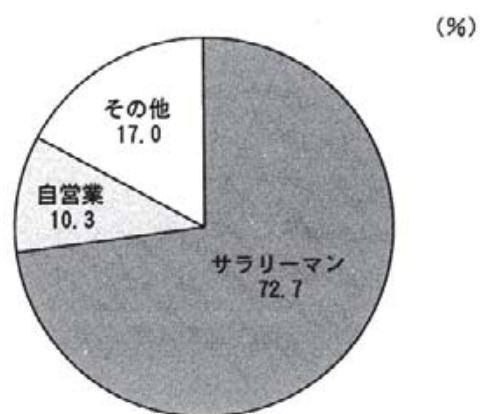
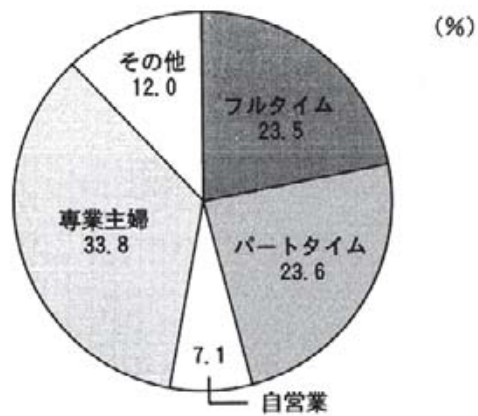


図4 母親の職業



1

子どもにとってのショック体験・不快体験



●毎日の暮らし)))

1) 朝の様子

まず子どもたちの日常生活が、どう展開されているかをみてみよう。夜更かし型が現代人の生活リズムだといわれるが、子どもたちの朝の様子はどうか。表2をみると、「朝、いつも1人で起きる」子は21%にすぎない。つまり8割は、何らかの形で起こしてもらっているという結果である。そのせいか、朝起きたときの気分が「スッキリさわやか」と答えている子は10%にすぎない(表3)。9割の子どもたちが、「朝少しぼんやりしている、眠くてボーッとしている」と答えている。

また図5から、さらに具体的に家庭での朝の情景をみると、「早くしなさい」と母親に

うるさく言われる子は、「しょっちゅう・わりとある」を合わせると44%、「朝、学校に行くのがいやだなと思うことがある」子が35%いる。3分の1の子どもが気の重い状態で家を出ている。やり残した宿題や学校への持ち物の準備が整わず、イライラすることがけっこうある子も3分の1を数える。

しかし、朝ご飯はよく食べてきているといえそうだ。無理して朝食を食べてくる子は16%にすぎない。しかし、遅刻を「1度もしたことがない」子が53%でしかないのは、問題だろう。

2) 近所の環境

次に家の近所の様子をみてみる。環境的に

不快な側面についてたずねたものが図6である。近所が「うるさい」という項目に、「とても・少しそう」と答えた子が37%、同じく

「遊び場がない」35%、「車が多くて危ない」29%と、都市環境を反映した数値となっているが、予想ほどには環境に対する子どもの不

表2 朝1人で起きるか

(%)		
いつも1人で起きる	ときどき起こしてもらう	だいたい起こしてもらう
20.9	44.2	34.9

表3 朝の気分

(%)		
スッキリさわやか	少しぼんやり	眠くてボーッとしている
10.2	54.3	35.5

図5 朝の様子

(%)				
	しょっちゅうある	わりとある	あまりない	ぜんぜんない
1. 「早くしなさい」と母親にうるさく言われること	16.7	26.9	35.6	20.8
2. 学校に行くのがいやだなと思うこと	15.3	19.4	32.2	33.1
3. 宿題が終わっていないこと	8.7	19.8	37.5	34.0
4. 学校に持っていくものが見つからないこと	8.4	29.6	45.7	16.3
5. 着ていく服が気に入らないこと	8.0	20.7	38.0	33.3
6. 遅刻をしたこと	6.7	12.7	28.1	52.5
7. 食べたくないのに無理して朝ご飯を食べること	4.2	12.0	40.3	43.5

快感は高くない。住めば都ということだろうか。しかし、「へんな人に追いかけられたことがある」子も、「とても・少しそう」を合

わせて22%いる。危険と隣り合わせて暮らしている子どもたちの様子がみてとれる。

図6 家の近所について

	とても そう	少し そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. うるさい	15.9	20.7	32.7	30.7
2. 遊び場がない	14.2	20.8	28.6	36.4
3. へんな人に追いかけられたことがある	8.8	13.1	9.4	68.7
4. 車が多くて危ない	8.5	20.7	36.2	34.6
5. 家がゴミゴミしている	6.4	17.8	39.9	35.9
6. まわりがきたない	5.4	13.0	44.1	37.5

3) 家庭の中で

家庭の中での不快感はどうか。子どもが自分の家庭の中で不快な思いをすることは、全くあってほしくないものだが、現実はそのもいかないようである。

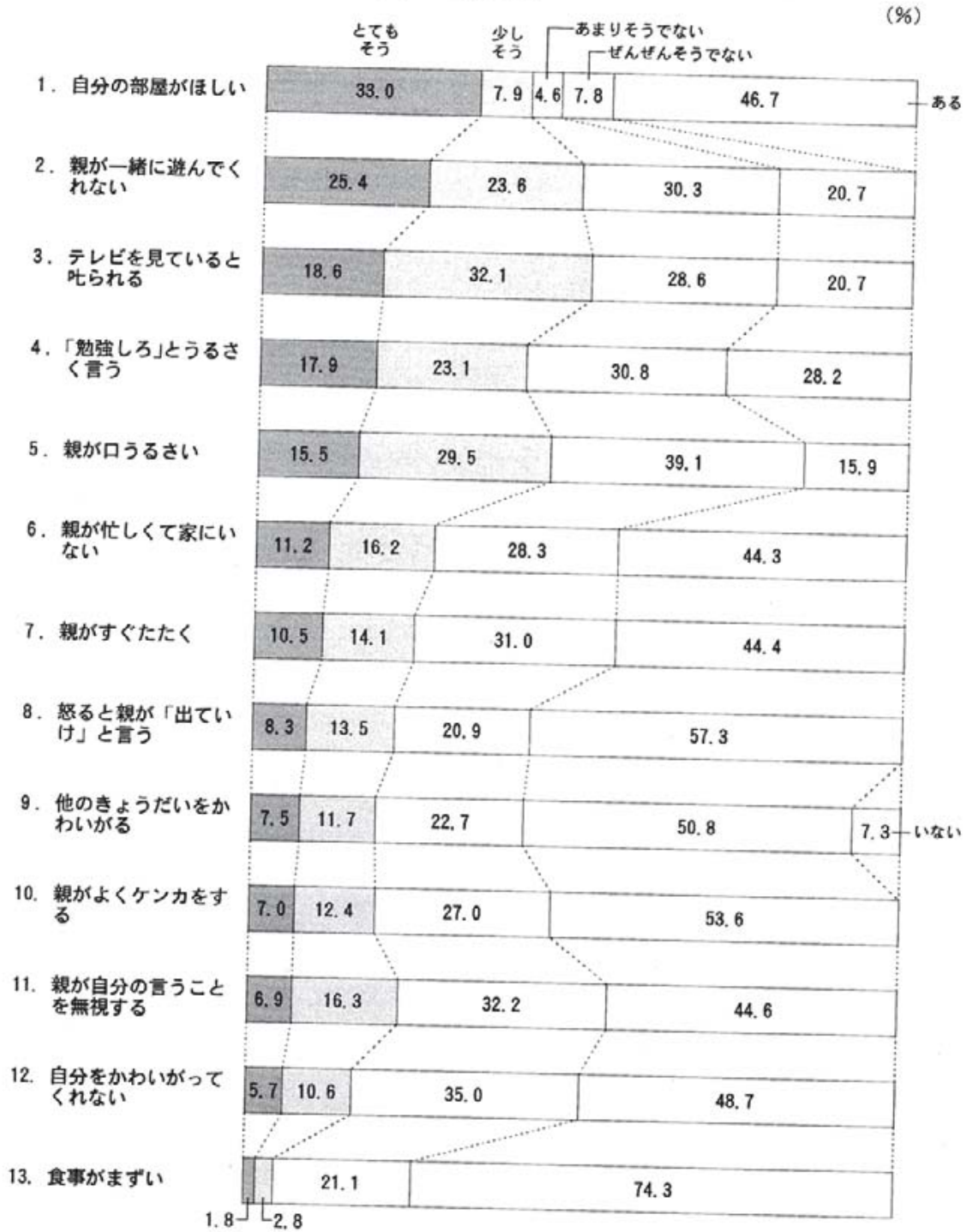
図7の13項目のうち、「自分の部屋がほしい」、つまり自分（おそらく専用）の部屋がないという項目が一番高く、「とても・少しそう」を合わせると41%となっている。

その他、「親と一緒に遊んでくれない」49

%、「テレビを見ていると叱られる」51%、「勉強しろとうるさく言う」41%、「口うるさい」45%など、親から種々の小言を言われている様子がみてとれる。しかし、こればかりは仕方のないことだろう。

また、数はそう多くはないが、「親がすぐたたく」（「とても・少しそう」を合わせて）25%、「怒ると親が出ていけと言う」22%、「他のきょうだいをかわいがる」19%、「親がよくケンカをする」19%など、最近の親の中にも、けっこう信じられないような親がいることがわかる。

図7 家の様子



●ショック体験)))

不快でショッキングな体験を好む人はいないだろうが、生きていくには、そうしたことから逃れられないのであれば、早くにそうした衝撃を乗り越えた経験を重ねておくことも、生きる力をつける上で、欠くべからざるものであろう。そのためには、幼少期にある程度のつらくて不快な体験を経験し、それから回復し乗り越えた体験を積み重ねることが必要である。

では子どもは、どの程度そうしたつらい体験を持っているのだろうか。そして、それをうまく乗り越えたのだろうか。

図8に示した12項目の数値をみると、子どもたちは意外に多くのショック体験があると言っている。図は「そうした体験がある」割合の高い順に並べたもので、「とてもこわい夢を見た」の80%を筆頭に、「仲よしの友だちとクラスが分かれた(78%)、大事なものをこわしたりなくしたりした(73%)、祖父母や親戚の人などの死(64%)、誰もいなくて家に入れなかった(62%)、仲よしの友だちが転校した(55%)」が、5割を超えて体験されている。

しかし、こうした体験を「ショック」と受け止めるかどうかは、項目によって違いがある。

12項目の中で、「とてもショックだった」

とするものの筆頭は、ペットの死(80%)であり、祖父母の死(61%)など、生死に関するものである。ちなみに、祖父母の死よりもペットの死に対する方がショックが強いのは、遠い祖父母より身近にいるペットに対して、きょうだい同然に、感情移入がされているためであろう。

また、「1,000円くらい落とした(77%)、自転車などが盗まれた(61%) こと」など、経済的損失についてもショックが大きい。「教師の転任(53%)や友人の転校(49%)」など、親しい人を失う経験も大きいものがあるようだ。

これに対して、「家に入れなかった、迷子になった」などは体験が多いわりにショックは低く、「わりと平気だった」と答えている子が多い(63%、49%)。

次に、さまざまな対人関係の中でのショックの度合いを比較したのが図9である。「いじめ」時代を表すように、友だちに仲間はずれにされたことや悪口を言われたときが、親や先生に叱られたときよりもショックが大きくなっている。またこれらの項目のいずれに対しても、「とても・わりと」を合わせると、6割前後の子がショックだとしている。子どもにとっての身近な人々との人間関係の意味が伝わってくる。

図8 ショック体験

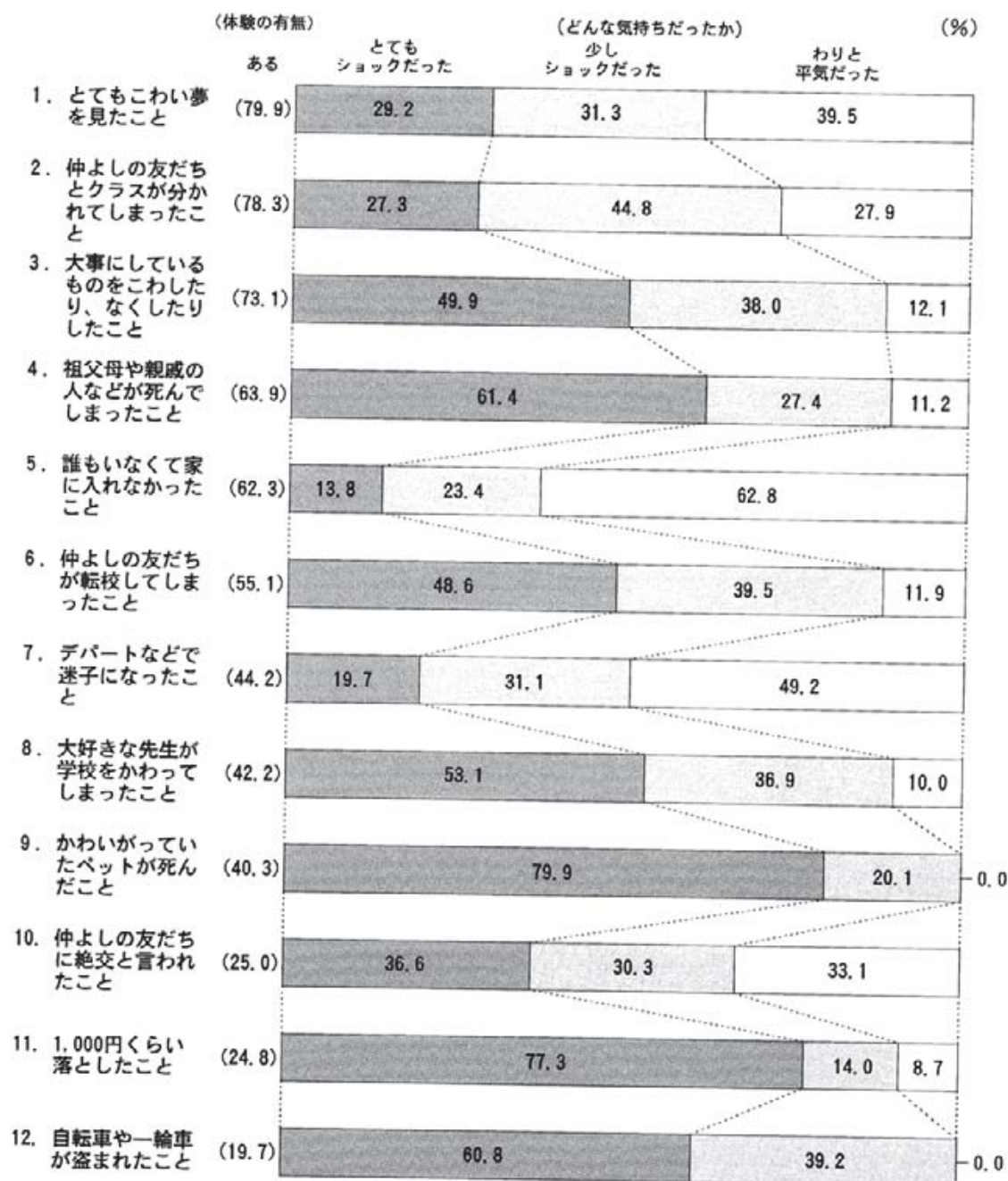


図9 どのくらいショックか

(%)

	とても ショック	わりと ショック	わりと 平気	ぜんぜん 平気
1. 友だちに仲間はずれにされたとき	34.4	27.2	20.6	17.8
2. 友だちにひどい悪口を言われたとき	30.9	25.9	23.7	19.5
3. 親にひどく叱られたとき	23.4	32.4	27.0	17.2
4. 先生にひどく叱られたとき	23.3	38.2	23.6	14.9

●不快体験の感じ方)))

1) さまざまな場面で

子どもにとって、さまざまな不快体験をみてきたが、体験を何回したかよりも、その受け取り方、感じ方の大きさの方が問題かもしれない。

表4は、心を傷つけるであろう項目を並べて、その体験の有無をたずねたものである。

これらが「何回もあった」割合の高い順にみると、「でぶなど体のことでからかわれた」39%、「仲のよい友だちから悪口を言わ

れた」34%、「クラスの子にいじわるをされた」24%、「頭が悪いと言われた」24%、「仲間はずれにされた」19%、となっている。

体のことでからかわれたり、頭が悪いと言われたり、うそつきと言われたりすることが「1回もない」という幸せな子は、半分以下でしかない。この数値をみながら、そんなとき子どもがどんな思いをしたかを考えると、なにやら切なくなる。

次に、これらのことを1回でも経験した子どもに、それを「思い出すとつらい」ほどのショック体験だったのか、それとも「べつに

表4 不快体験（体験の有無）

	(%)		
	何回もあった	1回くらいあった	1回もない
1. でぶなど体のことでからかわれたこと	39.2	23.9	36.9
2. 仲のよい友だちから悪口を言われたこと	33.6	42.1	24.3
3. クラスの子にいじわるをされたこと	23.8	31.9	44.3
4. 頭が悪いと言われたこと	23.7	29.6	46.7
5. 仲間はずれにされたこと	18.6	37.2	44.2
6. うそつきと言われたこと	17.8	35.2	47.0
7. 先生につげ口をされたこと	16.6	34.6	48.8
8. 友だちに貸したものを返してもらえなかったこと	12.9	34.4	52.7
9. きたないと言われたこと	8.0	16.9	75.1

平気」だったのかをたずねたのが図10である。「思い出すととてもつらい」と答えている子が多い項目は、「仲間はずれにされたこと(39%)、クラスの子にいじわるをされたこと(33%)」と、学校の中での友人関係がらみがトップとなっている。

その他、友人関係に関する項目はいずれも高い数値となっている。子どもには、おとな

よりも、友人関係の気まずい経験が一番こたえるようである。この点については、次章で詳しくふれてみたい。

一方、頭が悪いと言われたり、体のことをからかわれたりすることには、意外にも半数前後の子が、「べつに平気」と答えている。言われることに「慣れ」てしまったのだろうか。それとも友人関係をこわさないために、

図10 不快体験（思い出すとどんな気持ちか）

	思い出すと とてもつらい	思い出すと 少しつらい	べつに平気 (%)
1. 仲間はずれにされたこと	39.2	29.3	31.5
2. クラスの子にいじわるをされたこと	33.2	30.6	36.2
3. でぶなど体のことでからかわれたこと	28.8	23.7	47.5
4. 友だちに貸したものを返してもらえなかったこと	24.8	38.5	36.7
5. 仲のよい友だちから悪口を言われたこと	22.2	30.9	46.9
6. きたないと言われたこと	22.1	32.0	45.9
7. 頭が悪いと言われたこと	21.0	22.1	56.9
8. うそつきと言われたこと	17.0	28.1	54.9
9. 先生につげ口をされたこと	13.7	31.0	55.3

「べつに平気」と我慢をしまっているの
 だろうか。

2) 性差について

次に感じ方の性差をみてみたい。図11と図
 12、表5は、前述したショックに関する項目

と不快体験の感じ方の性差をみたものである。
 いずれのグラフも、女子の方が、心に受ける
 傷の大きさを訴えている。体験の回数自体に
 さほど男女差はなくとも、受け取り方には大
 きな差異があるようだ。とくに友人関係の気
 まずい経験に対して、女子がよりつらく思っ
 ていることがわかる。

図11 どのくらいショックか × 性

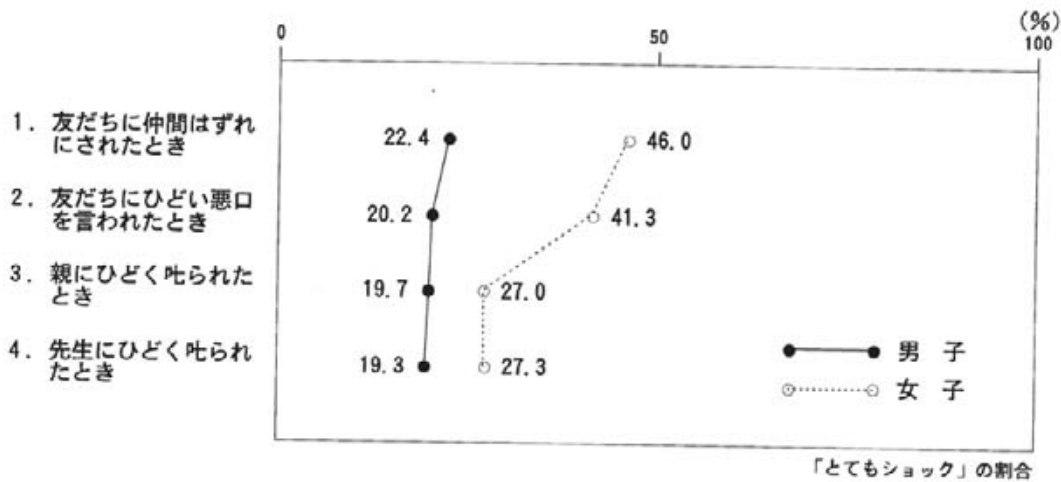
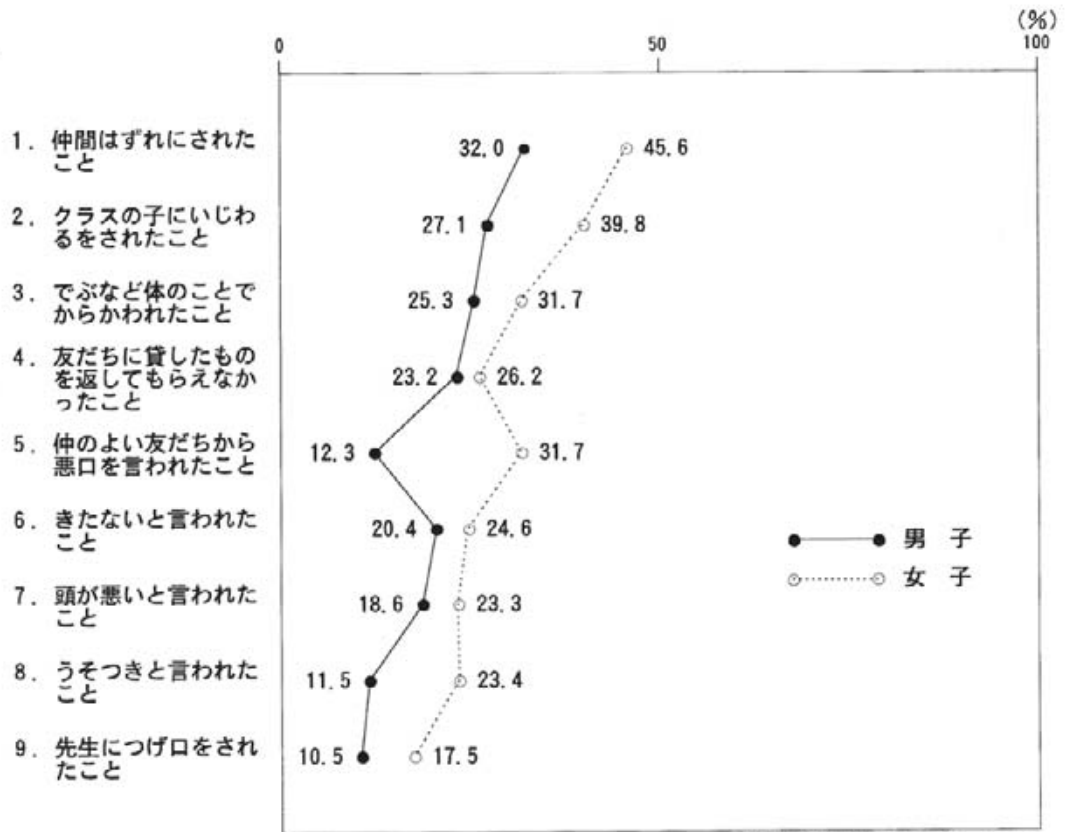


図12 不快体験（思い出すとどんな気持ちか）× 性



「思い出すととてもつらい」の割合

表5 不快体験（体験の有無）× 性

(%)

		何回も あった	1回くらい あった	1回も ない
1. でぶなど体のことでからかわれたこと	男子	37.9	22.3	39.8
	女子	40.4	25.4	34.2
2. 仲のよい友だちから悪口を言われたこと	男子	37.5	38.7	23.8
	女子	29.9	45.3	24.8
3. クラスの子にいじわるをされたこと	男子	26.2	32.7	41.1
	女子	21.6	31.3	47.1
4. 頭が悪いと言われたこと	男子	25.8	29.0	45.2
	女子	21.6	30.2	48.2
5. 仲間はずれにされたこと	男子	17.6	37.4	45.0
	女子	19.5	36.9	43.6
6. うそつきと言われたこと	男子	22.5	35.5	42.0
	女子	13.4	34.8	51.8
7. 先生につげ口をされたこと	男子	22.2	35.3	42.5
	女子	11.3	33.9	54.8
8. 友だちに貸したものを返してもらえなかったこと	男子	12.9	34.5	52.6
	女子	13.0	34.3	52.7
9. きたないと言われたこと	男子	9.9	20.5	69.6
	女子	6.2	13.5	80.3

3) 学年差について

本調査対象は、4年生から6年生までであるが、発達差はみられるのだろうか。

図13は、ショックに関する項目の学年差であるが、性差ほどの開きはないものの、いずれも学年が上がるにつれて、ショックと感じる度合いは少しずつ減っている。

また表6、図14は、不快体験の感じ方についての学年差である。体験の割合は学年ごとにさほど差はないものの、やはり学年が上がるにしたがって、「思い出すととてもつらい」子が減り、「べつに平気」とする子が増

えている。ただ友人関係だけは、6年生になっても「つらい」ものようだ。ともあれ子どもが、たくましく成長していく様子がわかる。

大方の子どもは年齢が上がるにつれて、不快な体験に数多く接し、「慣れ」ていくようである。心が傷つかないように、自己を守るすべを身につけたのかもしれないし、心の癒し方を覚えたのかもしれない。このようにして子どもも周囲に「適応」をしていくのだろうが、6年生になっても、「とてもつらい」とする子どもたちも少なくない。また人間関係の中でも、とくに友人関係の不快な体験には、なかなか慣れるのが難しいようである。

図13 どのくらいショックか × 学年

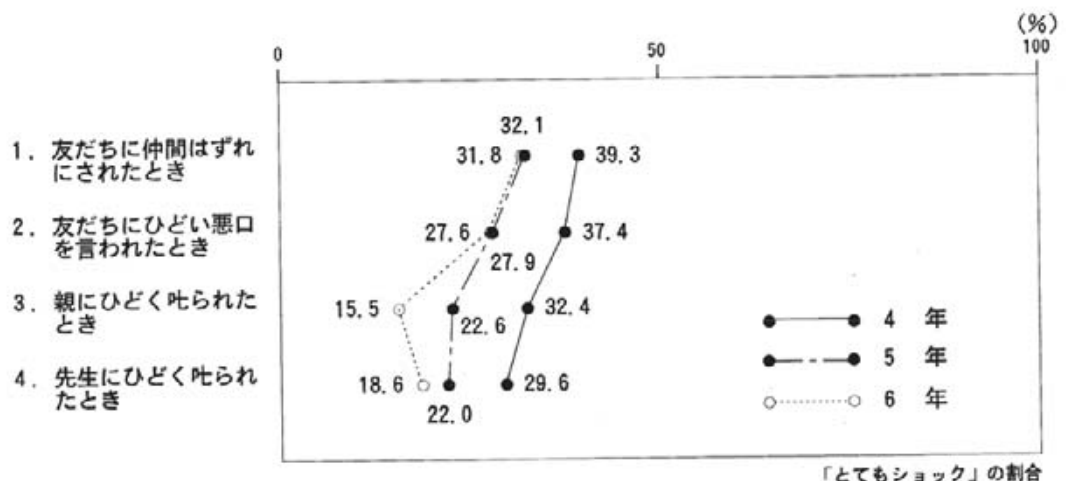
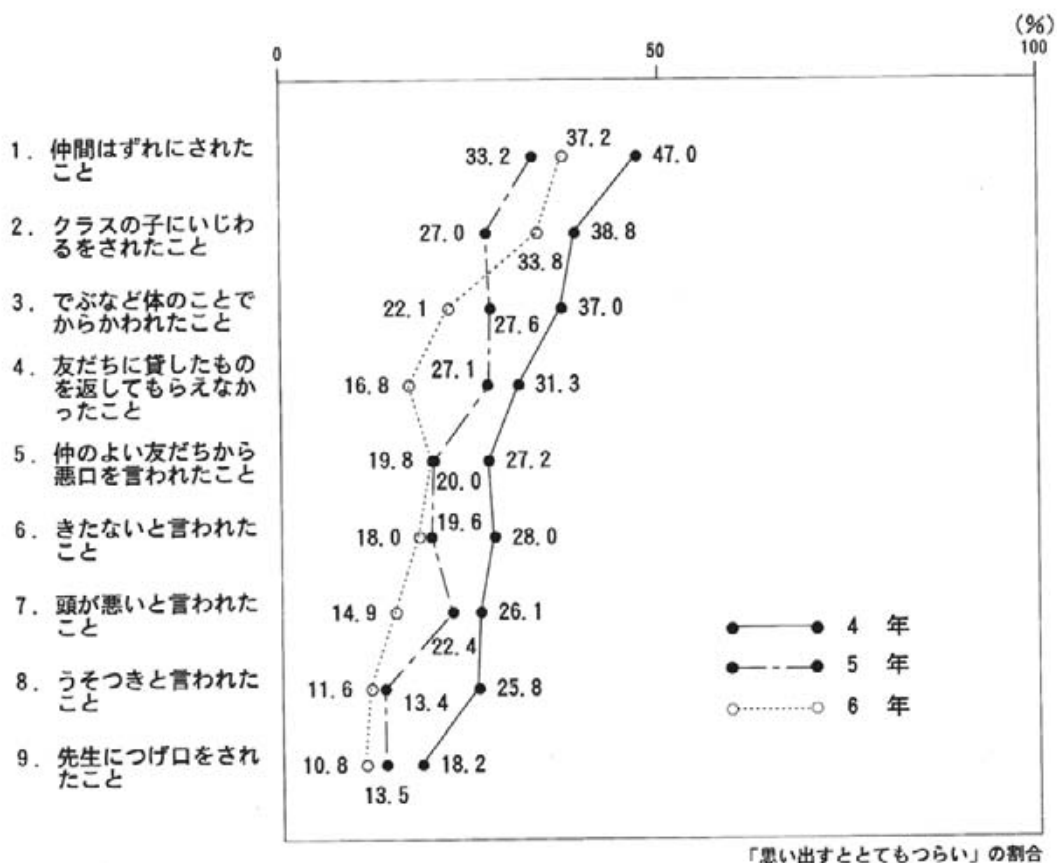


表6 不快体験（体験の有無）× 学年

(%)

		何回も あった	1回くらい あった	1回も ない
1. でぶなど体のことでからかわれたこと	4 年	39.8	22.5	37.7
	5 年	40.5	24.8	34.7
	6 年	37.3	24.4	38.3
2. 仲のよい友だちから悪口を言われたこと	4 年	32.6	42.0	25.4
	5 年	36.2	38.8	25.0
	6 年	32.1	45.3	22.6
3. クラスの子にいじわるをされたこと	4 年	27.4	31.2	41.4
	5 年	23.1	33.8	43.1
	6 年	21.2	30.9	47.9
4. 頭が悪いと言われたこと	4 年	20.6	30.2	49.2
	5 年	26.9	29.0	44.1
	6 年	23.5	29.7	46.8
5. 仲間はずれにされたこと	4 年	21.7	37.6	40.7
	5 年	16.6	38.3	45.1
	6 年	17.5	35.6	46.9
6. うそつきと言われたこと	4 年	18.6	37.1	44.3
	5 年	20.8	32.9	46.3
	6 年	14.3	35.5	50.2
7. 先生につげ口をされたこと	4 年	12.5	31.6	55.9
	5 年	19.2	32.2	48.6
	6 年	18.1	39.7	42.2
8. 友だちに貸したものを返してもらえなかったこと	4 年	13.1	29.9	57.0
	5 年	15.3	37.2	47.5
	6 年	10.5	36.0	53.5
9. きたないと言われたこと	4 年	8.8	17.5	73.7
	5 年	9.3	17.5	73.2
	6 年	6.1	15.8	78.1

図14 不快体験（思い出すとどんな気持ちか）× 学年



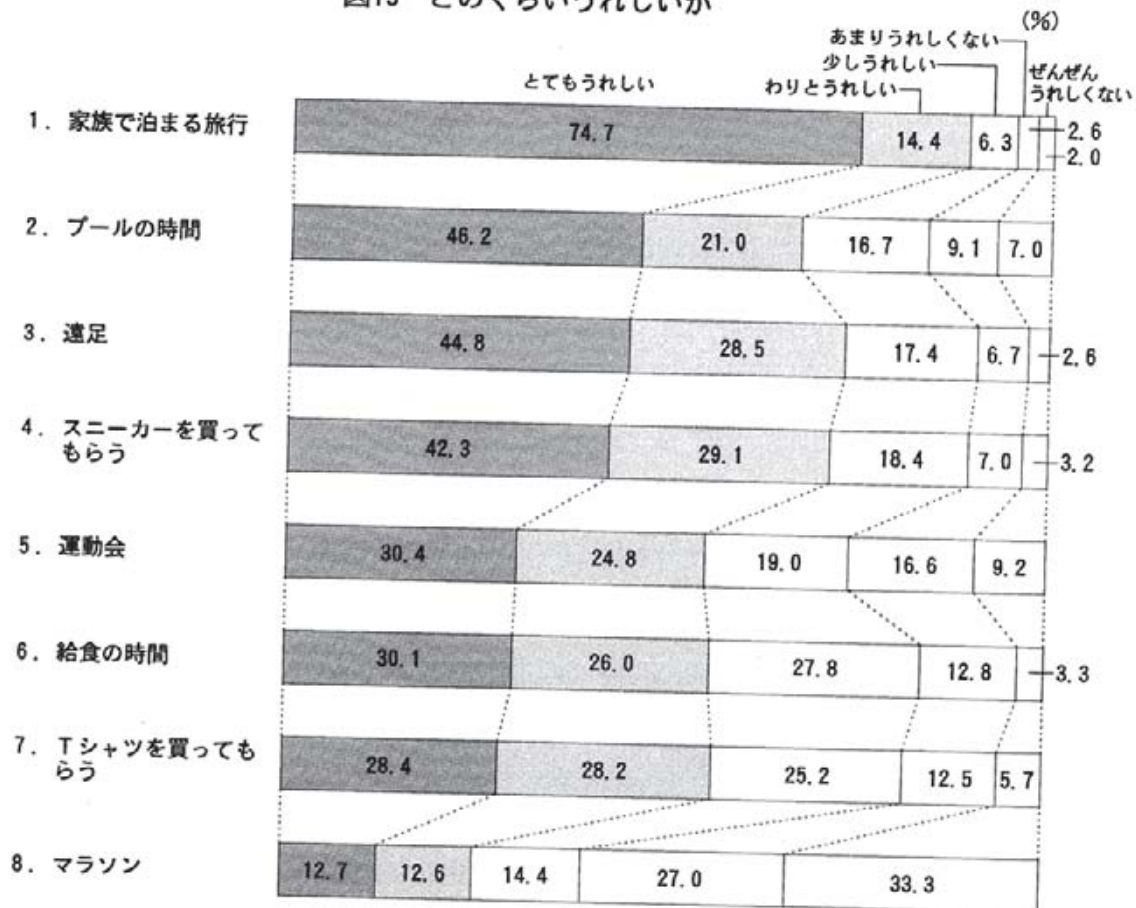
4) うれしいこと

以上、不快な体験を追ってきたが、ここで「快」の体験についても多少見ていこう。図15をみると、子どもたちは、「家族で泊まる旅行」が一番うれしいと答えている（「とても・わりとうれしい」の合計89%）。その他、「学校でのプールや遠足」（67%、73%）、「スニーカーなどを買ってもらうこと」（71%）

もうれしいと、率直に子どもらしい感情を表明している。

このうれしき、つまり快の体験は、不快の体験を忘れさせ、あるいは和らげるものであろう。たまの家族旅行や、あるいは心和むような体験を家庭でも学校でも多く作っていくことは、子どもたちの心身を安定させる大事なことのようだ。もっと意識して、こうした楽しみの時を作り出す努力が必要だろう。

図15 どのくらいうれしいか





●クラスの雰囲気)))

子どもの日々に体験した輝きと幸福感は、全ての人の胸の中で、生涯失われることのない宝物である。しかし、これまでみてきたように、子どもたちは少なからぬショッキングな体験や不快な出来事にも出会ってきている。むろん、彼らをいちばん厚く保護してくれている家庭の中ですら、子どもにとってそれなりのストレスが体験されている。

そして、子どもは毎日多くの時間を学校で過ごす。そしてそこでは、先生や級友とのかかわり、学習活動などなど、さまざまな出来事が展開される。学校は、後に子どもが社会人となって体験する場ほどではないが、しかし家庭からみれば、それなりに競争的性格を持った厳しい生活の場でもある。それに最近の学校には、「いじめ」もあれば「不登校」

もある。そこに子どもだけでなく、親の不安や心配もある。

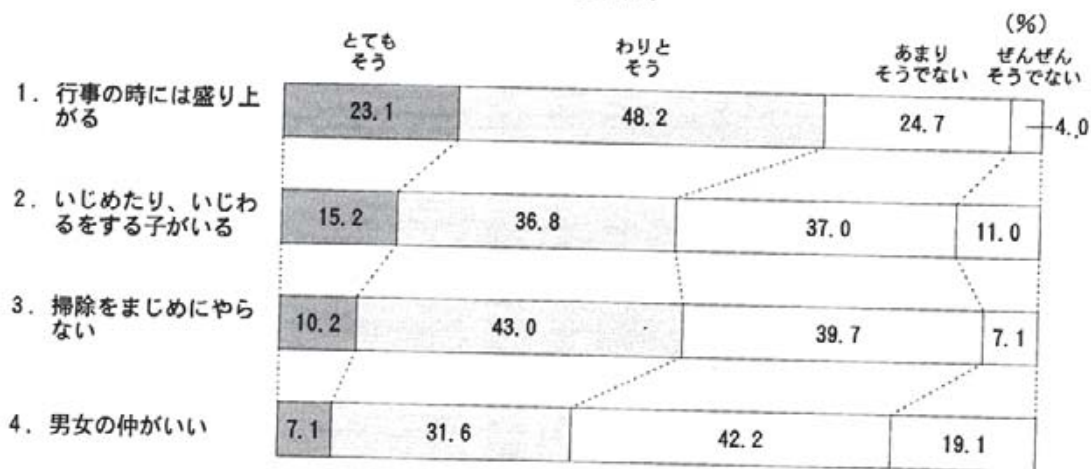
では子どもたちは、毎日、どんな学校生活を送っているのだろうか。子どもたちが毎日学校の中で出会っている、不快体験やショック体験を探ってみよう。

まず、子どもたちに今のクラスの居心地をたずねてみよう。図16によれば、子どもたちのクラスは、「行事の時には盛り上がる」（「とても・わりと」を合わせて71%）が、日頃はクラス内に「いじめ、いじわる」（52%）もあり、「掃除もまじめでない」（53%）と感じられている。「男女の仲がいい」クラスは4割でしかなく、思った以上にクラスは居心地のいい場ではなさそうである。ただ、同じクラスにいても、「男女の仲がいい」と

いう項目については、女子の方が積極的に評価している（男子31%＜女子46%）など、むしろクラスの差以外に、子どもによる感じ方に開きもありそうだ。最近の子どもたちは感じやすく、傷つきやすくなったと指摘されるが、こうしたクラスの状況は、最近の子どもたちの感じ方の中に問題があつての結果なのかもしれない。

また、巻末の集計をみると、それほど大きな学年差は認められないが、それでも「とても・わりとそう」の数値を比較すると、学年が上がるほど、やや掃除をまじめにやらなくなり（4年生49%＜6年生60%）、いじめやいじわるをする子は少なくなる（4年生58%＞6年生49%）傾向もみられる。

図16 クラスの雰囲気



次に、担任の教師との関係はどうか。図17が示すように、担任は「わかりやすく教えてくれる」(80%)し、子どもたちに「人気」もある(60%)が、「かっこいい」という子は37%しかいない。そして「よく怒る」(50%)し、「厳しい」(43%)という子も少なく

ない。しかし「宿題が多い」という不満は35%と、思ったほどではない。そして担任についての感じ方は学年差がみられ、図18のように、おおむね学年が上がるほど評価がからくなる。そんな中で興味深いのは、「怒る」「厳しい」の項目で、5年生の反応がやや高くな

図17 クラスの先生

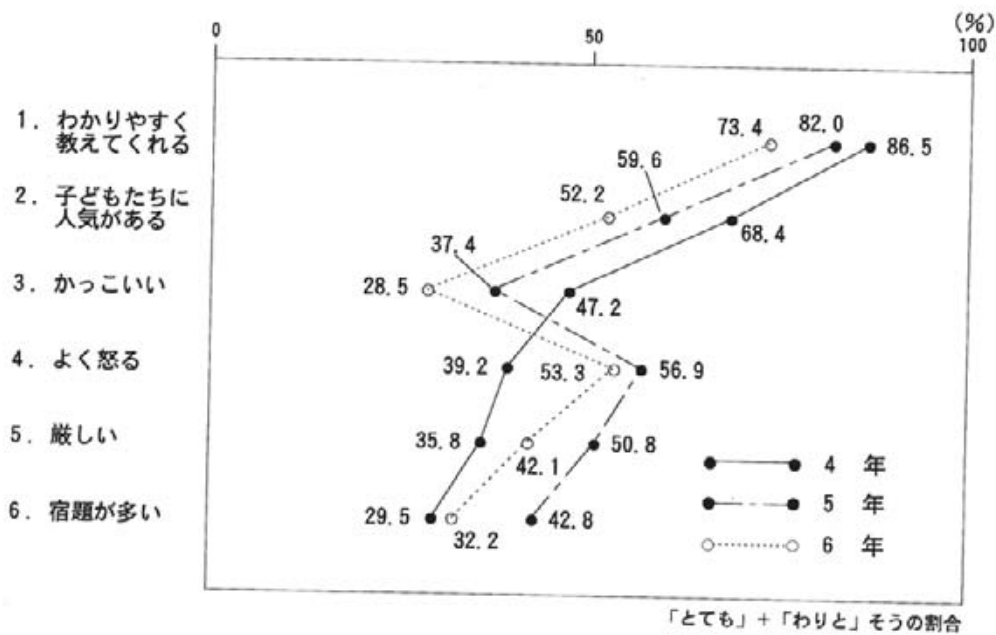
	(%)			
	とても そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでな
1. わかりやすく教えてくれる	32.9	47.5	15.0	4.6
2. 子どもたちに人気がある	21.3	38.4	28.5	11.8
3. かっこいい	11.6	25.7	35.6	27.1
4. よく怒る	18.2	32.0	41.6	8.2
5. 厳しい	17.3	25.8	41.6	15.3
6. 宿題が多い	15.6	19.4	46.6	18.4

る傾向である。4年生では、かっこよくて、人気があった先生が、5年生になると、厳しくしめつける存在に見えてくる。ちょうど思春期の入り口にさしかかり、教師と子どもの関係が難しくなる時期なのであろう。

そして、その時期を越えるとどうなるか。

6年生になると、子どもは担任への反発を弱めるが、それは担任との心の距離が開きはじめたことなのかもしれない。子どもがおとなになるということなのだろうが、何やら寂しい思いもある。

図18 クラスの先生 × 学年



●学校の中での傷ついた体験))

クラスによって雰囲気はそれぞれだし、また同じクラスにいても、子どもによって居心地のよさは違う。担任との関係が極めていい子もいれば、逆に、こじれた関係の中にいる子もいる。これまでのデータが示すものをまとめてみると、大まかにいえば、半数くらいの子どもにとっては、クラスはまあまあ居心地のいい場であり、2割弱の子どもにとっては、かなりつらい思いもする場となっているかのようである。

子ども時代を振り返れば、誰の中にも学校生活の中でのつらい体験のエピソードが、いくつかはよみがえってこよう。表7では、学校生活の中で、こうした体験をどのくらい重ねてきたかをたずねている。表の左側の数値が体験率で、その割合の高い順に項目を並べてある。「何回も・1回くらいあった」を合わせると、体験率はかなり高く、「授業中、笑われた」「みんなの前で先生にひどく怒られた」「忘れ物をして、自分だけ作業ができなかった」「自分は悪くないのに先生にひどく怒られた」、つまり対教師や教室場面で傷ついたなどは、半数以上の子がそうした出来事を体験している。また、友人関係でのトラブルを扱った「持ち物を勝手に使われた」「友だちに裏切られた」「遊びたい場所などをとられた」「仲よしの友だちが他の子と仲よくなった」などを6割が体験しているし、「みんなから、長い間いじめられた」という深刻な体験も30%に上っている。しかも、そ

のうちの3分の1は「何回もあった」と答えている。子どもの世界の間人関係の難しさが伝わってくる。

また、これらを学年別にみると、表の右側の数値が示すように、体験率にそれほど大きな差はみられない。しかし、下に並べたような友人関係で傷ついた体験は学年と共に減る傾向もあるが、授業場面や担任との関係で起こった体験「授業中、ドジな答えを言って笑われた」「みんなの前で先生にひどく怒られた」や「自分が悪くないのに先生に怒られた」の体験率は、学年を追ってむしろ高くなっている。

では、こうした体験は、子どもたちの心にどんな影を落としているのだろうか。図19は「思い出すと、どれくらいつらい気がするか」をたずねた結果である。

カッコ内の数値は、それぞれのエピソードの体験率を示しているが、つらさの順位は、体験の多さとは関係ないことがわかる。思い出して最もつらいのは、やはり「みんなから、長い間いじめられたこと」であるという。「とてもつらい」48%、「少しつらい」26%と、体験した子のほとんどがまだ心の傷を癒せずにいる。全体の項目をみても、友人と、あるいは先生との関係で傷ついたつらさを、まだ抱えたままにいる子も少なくない。ざっと体験率とつらさの度合いをかけあわせてみても全体の4分の1ほどの子どもが、受けた心の傷を乗り越えられずにいることになる。

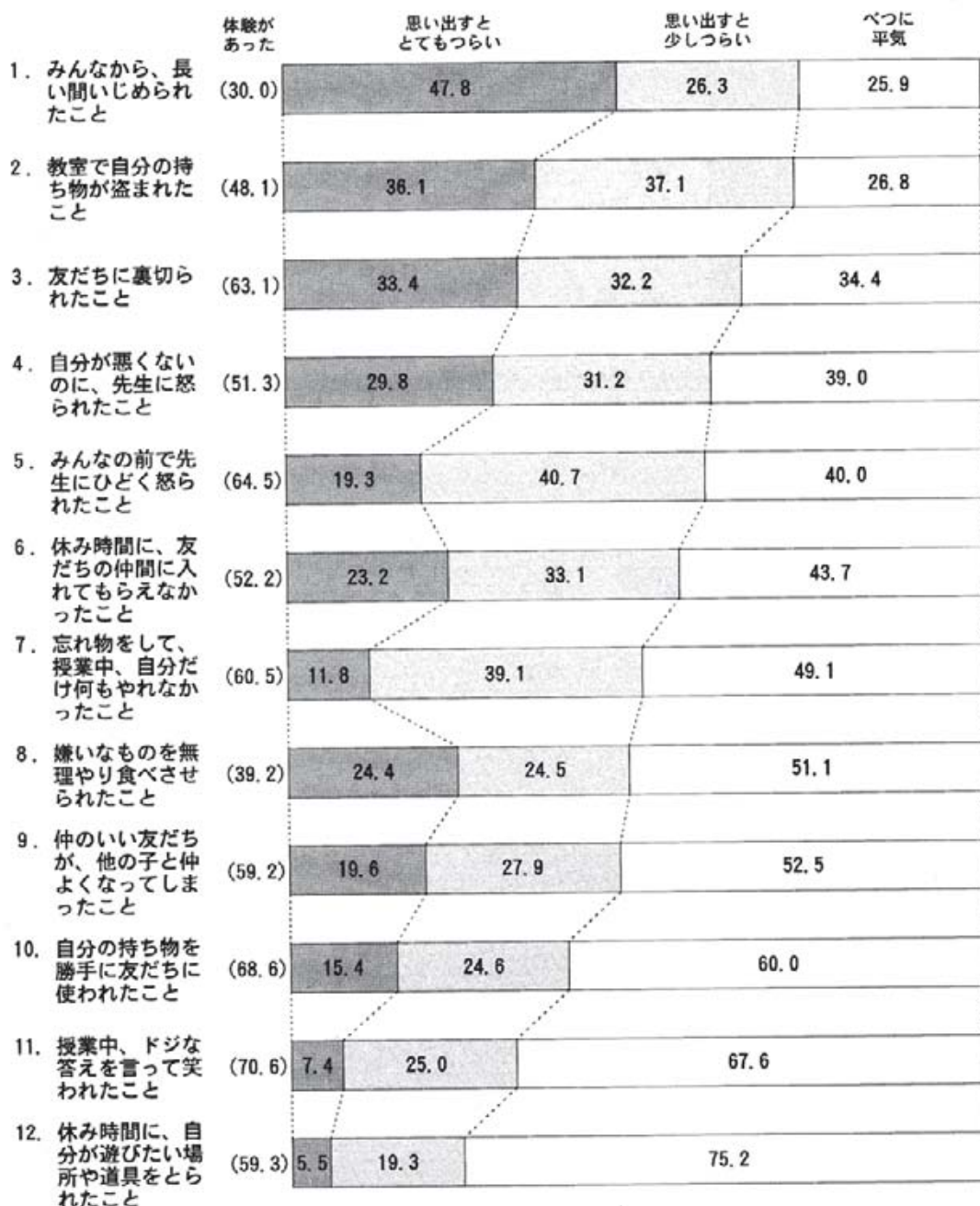
表7 学校生活の中で傷ついた体験

(%)

	あった		なかった	あった(学年別)			
	何回も	1回くらい		4年	5年	6年	
1. 授業中、ドジな答えを言 って笑われたこと	┌──70.6──┐ 18.5 52.1		29.4	63.8	73.1	74.9	<
2. みんなの前で先生にひど く怒られたこと	┌──64.5──┐ 20.5 44.0		35.5	54.6	66.1	72.5	<
3. 忘れ物をして、授業中、 自分だけ何もやれなかつ たこと	┌──60.5──┐ 15.3 45.2		39.5	57.0	63.7	60.7	
4. 自分が悪くないのに、先 生に怒られたこと	┌──51.3──┐ 14.8 36.5		48.7	44.4	52.3	57.1	<
5. 嫌いなものを無理やり食 べさせられたこと	┌──39.2──┐ 15.8 23.4		60.8	41.0	36.9	39.6	
6. 自分の持ち物を勝手に友 だちに使われたこと	┌──68.6──┐ 28.9 39.7		31.4	67.2	68.1	70.3	
7. 友だちに裏切られたこと	┌──63.1──┐ 21.7 41.4		36.9	62.9	64.6	62.0	
8. 休み時間に、自分が遊び たい場所や道具をとられ たこと	┌──59.3──┐ 21.4 37.9		40.7	64.5	59.0	54.6	>
9. 仲のいい友だちが、他の 子と仲よくなってしまっ たこと	┌──59.2──┐ 22.4 36.8		40.8	56.2	60.6	60.8	
10. 休み時間に、友だちの仲 間に入れてもらえなかつ たこと	┌──52.2──┐ 13.9 38.3		47.8	54.3	51.8	50.4	
11. 教室で自分の持ち物が盗 まれたこと	┌──48.1──┐ 13.4 34.7		51.9	51.5	48.0	44.9	>
12. みんなから、長い間いじ められたこと	┌──30.0──┐ 10.3 19.7		70.0	32.7	29.9	27.7	>

図19 学校生活の中で傷ついた体験（思い出すとどんな気持ちか）

(96)



●学校で傷ついた体験と友人関係))

多くの子どもたちが集まって暮らす場であるから、対人関係の中でのトラブルは、いつの時代にも、どの学校やクラスにも必ずついてまわる。そうした体験を通して、子どもたちが学ぶことも多いはずである。しかし、これまでみてきたように、そうしたトラブルによって受けた傷を、長く癒すことができない子どもも決して少なくない。そうした体験は、友人関係のあり方や性格形成にマイナスの影響を与えないのだろうか。

この点を確かめようとして、子どもたちに「友だちに嫌われるのではないかと心配することがありますか」とたずねてみた。

- | | |
|-------------|-------|
| ・しょっちゅうある…… | 13.2% |
| ・わりとある…… | 26.0% |
| ・あまりない…… | 36.5% |
| ・ぜんぜんない…… | 24.3% |

この数字が示すように、「しょっちゅうある」と「わりとある」を合わせると、友人関係に不安を感じている子は、全体の39%。決して無視していい数字ではない。しかし「ぜんぜん心配していない」という子も24%いる。

ここでも感じ方に開きがみられる。次に、こうした友人関係への不安と、学校で傷ついた体験との関係をもてみよう。

表8では、友だちに嫌われるのではないかと「しょっちゅう心配な子」と「ぜんぜん心配でない子」に分けて、体験率とそのつらさをみている。全体としては心配な子は心配でない子より、全ての項目で「何回もあった」「つらい」数字が高くなっている。また不安の高い子、低い子で差のとくに大きな項目に「>>」をつけたが、表の下位の方、「いじめられ体験が何回もあった」(42%、6%)をはじめ、「友だちに裏切られた」(43%、20%)、「仲のいい友だちが他の子と仲よくなった」(44%、20%)、「仲間に入れてもらえなかった」(34%、9%)と、不安の高い子の傷ついた体験の割合が多いことが目を引く。

しかも、表の右側のつらさの度合いの数字をみると、「いじめられ体験」では、「思い出すとつらい」という子が、不安の高い群では91%とほとんどである。他の、友人関係で傷ついた体験についても、不安の高い群のほとんどの子どもが生々しい体験として、今も胸に残っている様子がわかる。

表8 学校生活の中で傷ついた体験 × 友人関係の不安

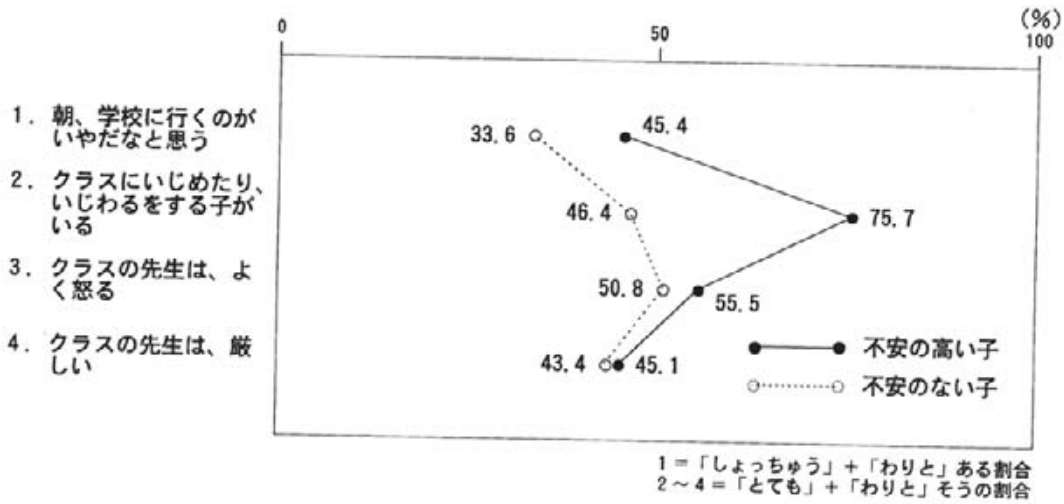
(%)

	何回もあった		思い出すとつらい	
	不安が高い子	ぜんぜん不安でない子	不安が高い子	ぜんぜん不安でない子
1. 授業中、ドジな答えを言って笑われたこと	24.6	20.2	50.8	21.6
2. みんなの前で先生にひどく怒られたこと	28.3	21.7	78.6	49.9
3. 忘れ物をして、授業中、自分だけ何もやれなかったこと	18.9	17.8	65.7	42.4
4. 自分が悪くないのに、先生に怒られたこと	25.3	14.5	69.5	55.3
5. 嫌いなものを無理やり食べさせられたこと	22.0	15.2	50.7	44.3
6. 自分の持ち物を勝手に友だちに使われたこと	40.1	26.1	59.5	29.5
7. 友だちに裏切られたこと	43.4	19.6	82.4	51.2
8. 休み時間に、自分が遊びたい場所や道具をとられたこと	28.2	20.1	40.5	17.9
9. 仲のいい友だちが、他の子と仲よくなってしまったこと	43.9	20.2	62.5	36.9
10. 休み時間に、友だちの仲間に入れてもらえなかったこと	33.9	8.9	76.1	41.5
11. 教室で自分の持ち物が盗まれたこと	23.4	12.4	83.0	67.1
12. みんなから、長い間いじめられたこと	42.0	6.2	91.3	59.3

また、友人関係での不安の高い子どもでは図20にあるように、76%もが「今のクラスにいじめたり、いじわるをする子がいる」と答えている。こうした子どもたちを、どうすれば安心できる友人関係体験の中で過ごさせる

ことができるだろうか。「いじめ」問題への対応も含め、われわれおとなには大きな課題が用意されていることを改めて感じさせられる数値である。

図20 友人関係に不安のある子 × 学校への思い





●子どもが抱えている心配)))

前章では、過去の友人関係での傷ついた体験の積み重ねと、それによってできた心の傷から、現在の友人関係にも不安を抱いているかのような子どもの姿をみてきた。日常生活の中での友人関係のトラブルに過敏に反応し、おどおどしながら暮らすかのような、一部の子どもたちの姿をみる思いがする。

しかし、こうした状況は、友人関係の領域に限られたものなのだろうか。もう少し子どもたちの心を探ってみたい。

まず、友人関係ばかりでなく、天災や病気といったいろいろなタイプの不安についても合わせて取り上げてみた。

図21では、失敗への不安、友人関係の不安、家族の病気、そして大きな地震への不安の7項目を用いて「心配になることがどれくらい

あるか」とたずねている。結果をみると、1、2の項目のような学校生活での失敗場面への不安は、半数近くの子どもの「しょっちゅう」「わりと」感じている。高学年ともなると、失敗を避けたい気持ちが大きくなり、予期不安が高まってくるのであろう。これに、3、4などの、友人関係に関する不安が重なる子どもは、学校生活の中でいっそう不安を強めることになる。

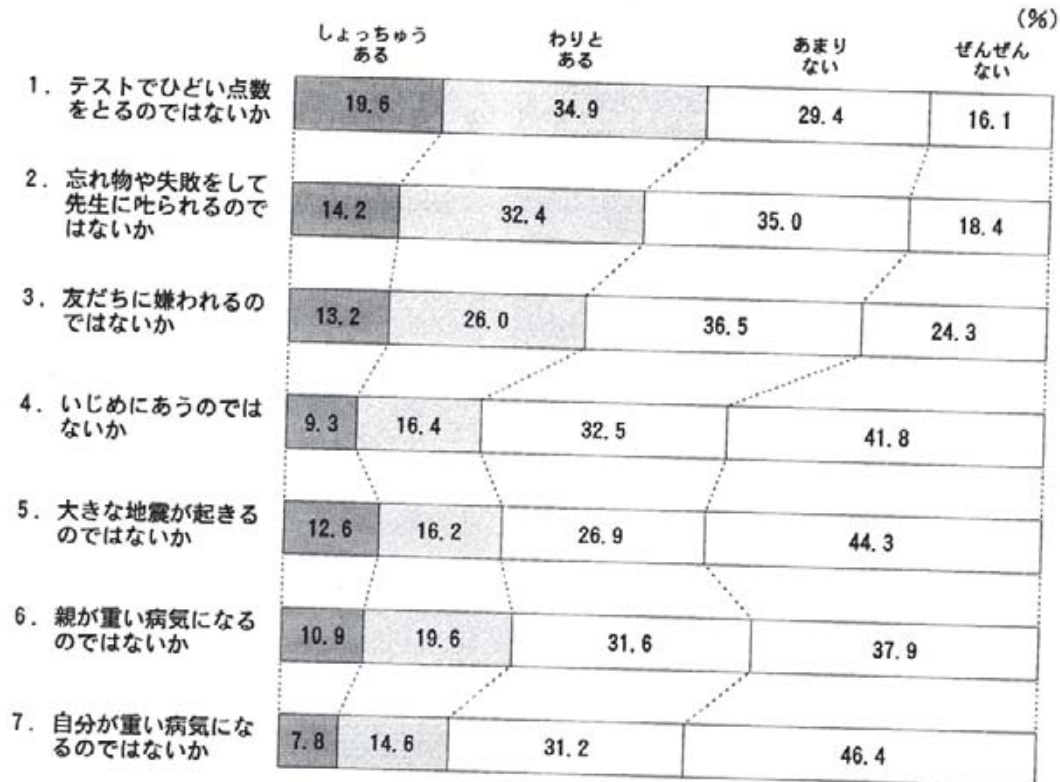
また、「地震についての不安」も、調査時期が1月の阪神大震災以前であったことを考えると、予想以上に多い。おそらく、間接的な形であっても、あれだけの災害を体験した今では、子どもたちの不安は、さらに大きなものとなっているに違いない。

また、「親や自分が重い病気にかかるので

はないか」と不安に思う子が2割から3割という数値も、決して小さなものではない。現代は不安の時代といわれるが、改めて問いかけてみると、それは子どもたちの中でも同じ

状況が広がっていることを感じる。直接の比較はできないが、もしかしたらその不安は、おとな以上かもしれないのである。

図21 心配なこと



●ショック体験が引き起こすもの)))

子どもたちのこうした不安感、どこから生まれてくるのだろうか。

1つには、子どもがマスメディアを通して間接的に体験する、さまざまな出来事の影響が考えられる。情報化社会の中で子どもたちは、われわれおとなとほぼ同じ条件で、連日世界の出来事に触れている。世界中から毎日ショッキングな映像が生活の中に入り込んでくる。

そしてもう1つは、友人関係のデータが示しているように、子どもの世界が競争的性格の強い場となってきた状況や、そうした中で、他人との絆が結び難くなってきているような子どもの育ち方によるものであろう。

第1章で触れたように、子どもたちも大切な人との別れや、大事なものを失う体験などたくさんの喪失体験に出会い、何度もショックを味わってきている。そうしたショック体験が引き起こす影響について、次にみてみたい。

ここでは、第1章の図8で取り上げたショック体験の中から、体験率の低い3項目を除いた9項目を用いて、ショック体験の加算点を算出した。図22にショック体験加算点の分布を示したが、図両側のショック体験の多い群と少ない群について、以下で比較してみていきたい。

次の図23は、先ほどの不安感についてのデータである。図が示すように、どの項目においても、ショック体験の多い群は少ない群に比べて「心配する」と答える割合が多い。中でも「友人関係」や「親の病気」の数値の差が大きい。また、図24をみると、過去のショック体験が彼らの中の不安を全般的に増大させるだけでなく、友人や親、教師といった周囲の人々とのトラブルへの耐性にも影響を与えていることがわかる。ショック体験の多い群では、人間関係の中で傷つく体験があったとき、きっと「とてもショックだろう」と予測する子どもが多い。

図22 ショック体験加算点の算出項目と分布

	あった	なかった
1. とてもこわい夢を見たこと	1点	0点
2. 仲よしの友だちとクラスが分かれてしまったこと	1点	0点
3. 大事にしているものをこわしたり、なくしたりしたこと	1点	0点
4. 祖父母や親戚の人などが死んでしまったこと	1点	0点
5. 誰もいなくて家に入れなかったこと	1点	0点
6. 仲よしの友だちが転校してしまったこと	1点	0点
7. デパートなどで迷子になったこと	1点	0点
8. 大好きな先生が学校をかわってしまったこと	1点	0点
9. かわいがっていたペットが死んだこと	1点	0点

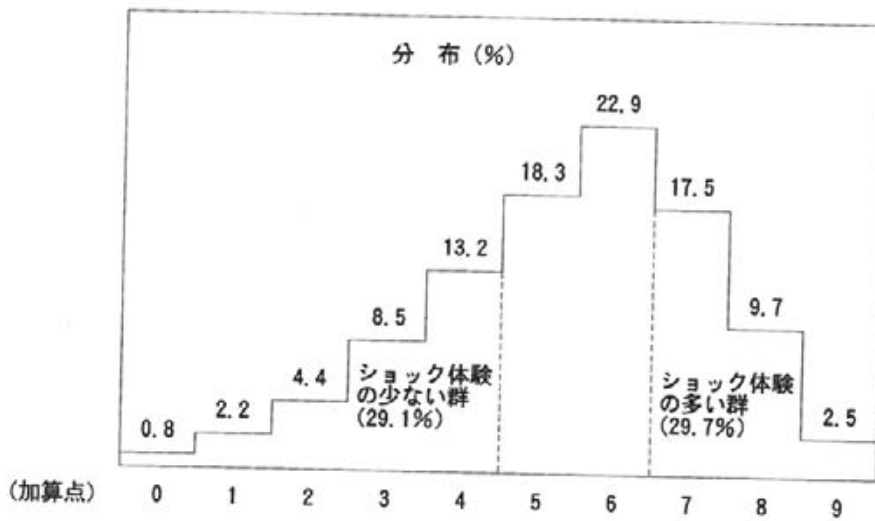


図23 ショック体験 × 心配なこと

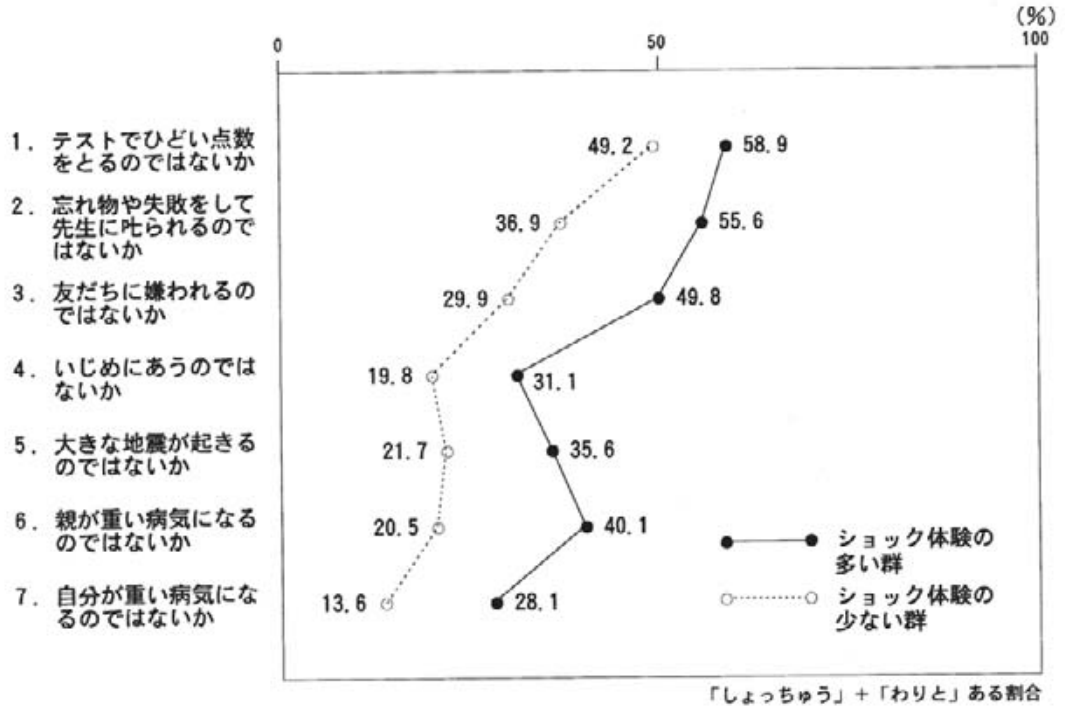
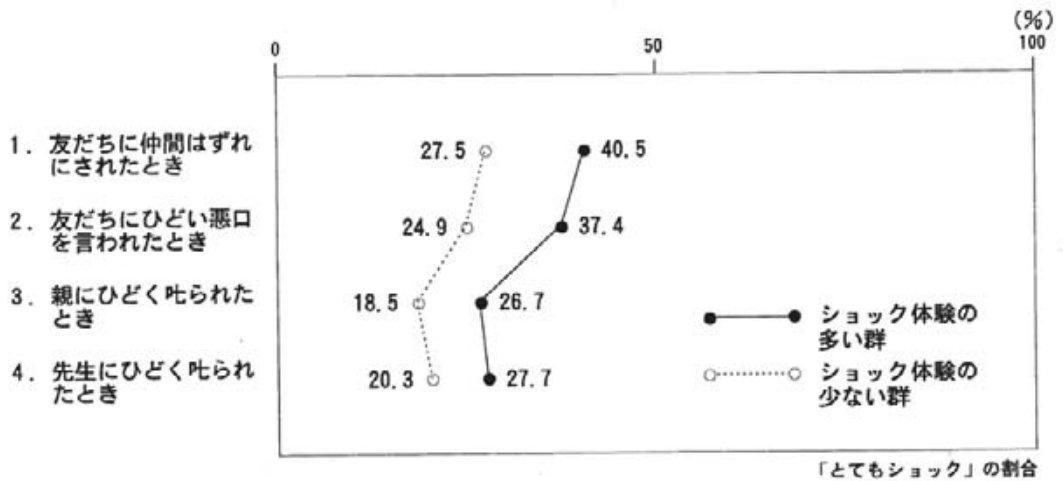


図24 ショック体験 × ショックを受ける強さ

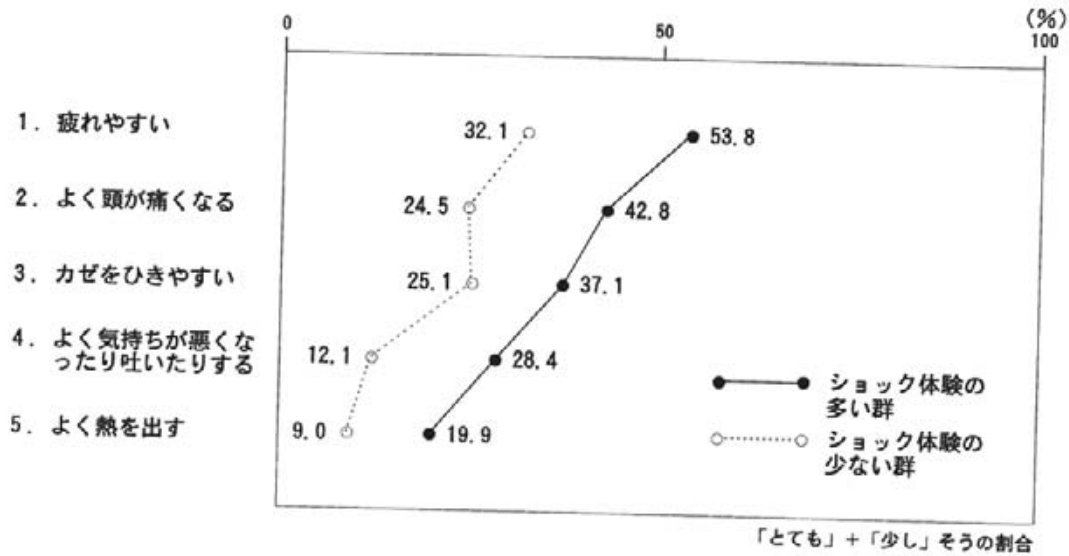


さらに、データを見ていくと、図25に示されるように、ショック体験の多い群では、「疲れやすい」「よく頭痛がする」といった体調の悪さを訴える子も少なくない。

日常生活の中でいろいろな不安感を抱えており、いざ対人関係のトラブルに触れると傷

つきやすいし、なんとなく体調にも自信が持てないという子どもたち。データを見る限りショック体験が多ければ、それだけショックへの耐性がつくというわけではなさそうである。むしろ深刻な体験が、彼らの心に残って癒されない状況が見いだされる。

図25 ショック体験 × 体調



4

子どもの自己回復力



●いやなことがあったときの回復法)))

ではどうすれば、子どもたちが傷つく体験からくる不安を乗り越え、心の健康度を高めていくことができるのだろうか。

最後に、子どもの心の傷が癒され、成長へと向かうために必要な条件について考えてみたい。

まず、子どもたちが日ごろ、心のバランスを崩したときに、どのように回復を図っているのか、たずねてみた。図26はいやなことがあったとき、それを忘れるためにする行為で

ある。

まず誰かに話して忘れる、というやり方では、「友だちに話す」が「親に話す」より、「わりと」を含めると、やや多くなっている。子どもにとっての友だちの大切さが、ここにも表れている。おとなのように「1人で気晴らしする」方法として、「テレビやマンガを見る」「ゲームをする」があり、また「寝てしまう」「思いっきり泣く」「おやつを食べる」も少数ながらみられる。

図26 いやなことを忘れる工夫

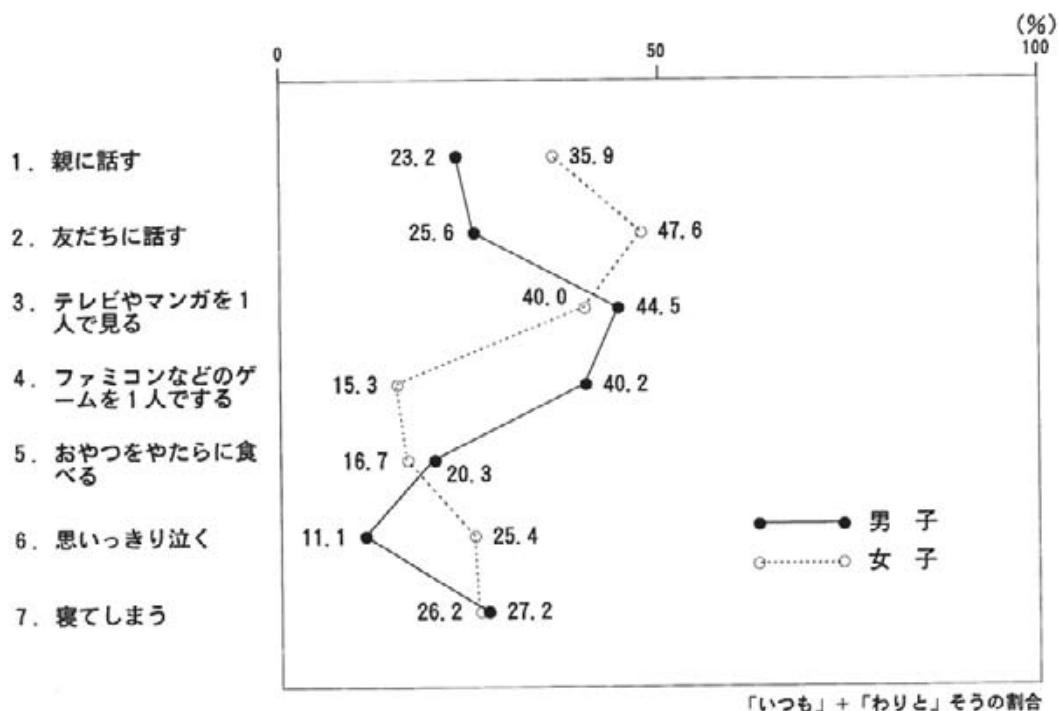
(%)

	いつも そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. 親に話す	10.8	18.9	24.9	45.4
2. 友だちに話す	10.6	26.2	24.4	38.8
3. テレビやマンガを1人で見る	14.3	27.9	23.9	33.9
4. ファミコンなどのゲームを1人でする	11.1	16.4	24.1	48.4
5. おやつをやたらに食べる	8.6	9.8	25.2	56.4
6. 思いっきり泣く	7.4	11.1	26.1	55.4
7. 寝てしまう	7.3	19.4	33.4	39.9

また性差もあって、図27の男女別のデータをみると、男子では、もっぱらテレビやマンガ、そしてテレビゲーム相手の気晴らし型の

回復法を選んでおり、女子は、友だちや親に話すとか、思いっきり泣くなどといった発散型の回復法をとっている子が多いようである。

図27 いやなことを忘れる工夫 × 性



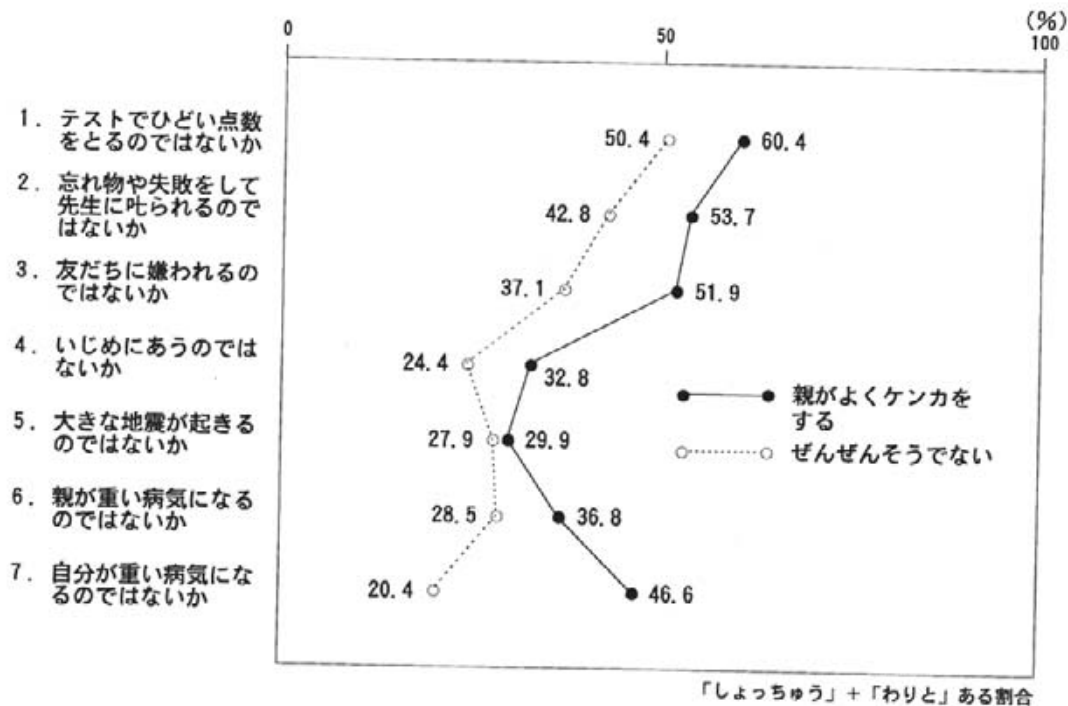
「いつも」+「わりと」その割合

●家庭の安定感との関連で)))

その子にあったショックや心配事からの回復法を身につけていくことは、むろん成長過程での発達課題の1つであろうが、子どもにとって、家庭がどの程度、子どもの自己回復を助ける場となるかということも、大事なことであろう。これはむろん、おとなの場合にもあてはまる。図28は、先にみた図7に掲げた「親がよくケンカをする」の項目について、「よくケンカをする」子と「ぜんぜんケンカをしない」子の「不安感」を比較したものである。

図が示すとおり、「親がよくケンカをする」子の方が全項目にわたって不安感が高いが、中でも、「自分が重い病気になるのではないか」とする子が半数近くとなっている。人の安定感とは、まず身体の健康の上に築き上げられるものである点を考えると、親の不和は、子どもの中の基本的な安定感すら奪ってしまうとみてよいかもしれない。思春期の入り口にあつて、対応が難しい時期だけに、子どもを支える環境としての家庭の健康さと安定性の必要性が、改めて確認できそうである。

図28 家庭の安定感 × 心配なこと



●まともに代えて)))

しかし、家庭にせよ学校にせよ、またおとなの場合なら職場にせよ、人はさまざまな環境から受けるデメリットにもかかわらず、自分の中にそれらを克服する力を備えることのできる生き物である。

そこで最後に、「自分は、いやなことでもすぐ忘れられる」と、自信を持って答えることのできる子どもの姿に注目してみたい。

自己評価のスケールの1つとして入れた、「いやなことも、すぐに忘れられる」の項目に対しての反応は、

- | |
|------------------|
| ・とてもそう……………24.7% |
| ・少しそう……………24.7% |
| ・あまりそうでない……30.8% |
| ・ぜんぜんそうでない…19.8% |

で、半分くらいの子どもはけっこう回復力に自信を持っている。この項目を使って、他の自己評価項目への反応を、回復力に自信のある子とない子で比べてみたのが、図29である。

差の大きな項目は、「小さいことは気にしない」である。すぐに忘れられる子では70%が「とてもそう」としているが、忘れられない子では、17%と差が大きい。それに加えて、「外遊びがとても好き」(64%、43%)、「友だちがとても多い」(51%、32%)と、外で思う存分に発散し、友だち関係にも支えられ

ている様子が見られる。とりわけスポーツが得意なわけではなくても、友だちと遊びまわれる力があれば、回復力には自信が持てるのであろう。

また図30に示したように、外遊びが好きな子は、そうでない子に比べて、学校行事や家族旅行などのたびに、楽しんでいる。さらに図31に示したように、今も幸せだし、これまでもそうだったし、そしてこれからも幸せだろうと思っている。

「友だちとの外遊びが大好きだ」といえる子どもたちの姿は、健康なエネルギーに溢れている。何でも楽しみ、誰とでもすぐ仲間になれる。それでこそ子ども本来の姿であり、子どもらしい暮らしであろう。しかし今、多くの子どもたちが友人関係のトラブルを恐れ、さまざまな心の傷を抱えたまま不安な思いで学校生活を送っている様子が、これまでのわれわれのデータの中にも見えかくれしていた。

深く心の傷を与える体験から子どもを守ろうとする配慮は、むろんおとなの側に必要だが、それ以上に大切なことは、子ども本来の姿がのびのびと発揮できるような、健康で幸せ感にあふれた暮らしを、どう保障してあげるかということであろう。子どもの中に大きな自己回復力を育てることこそが、これからわれわれが達成すべき大きな課題の1つであろう。

図29 いやなことでもすぐに忘れられる子のタイプ

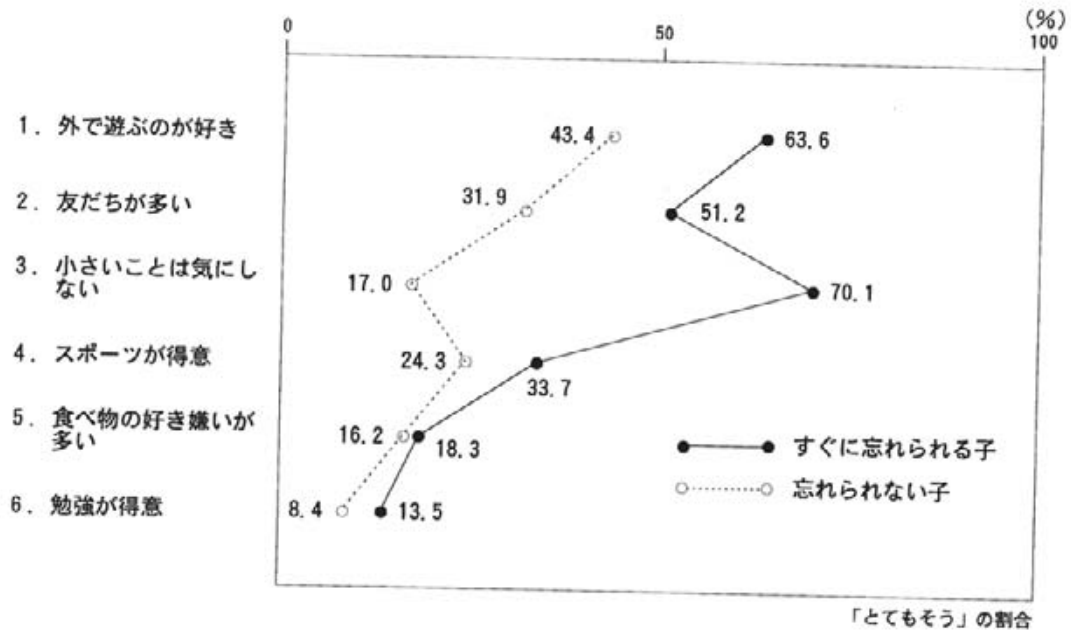


図30 うれしい体験 × 外遊びが好き

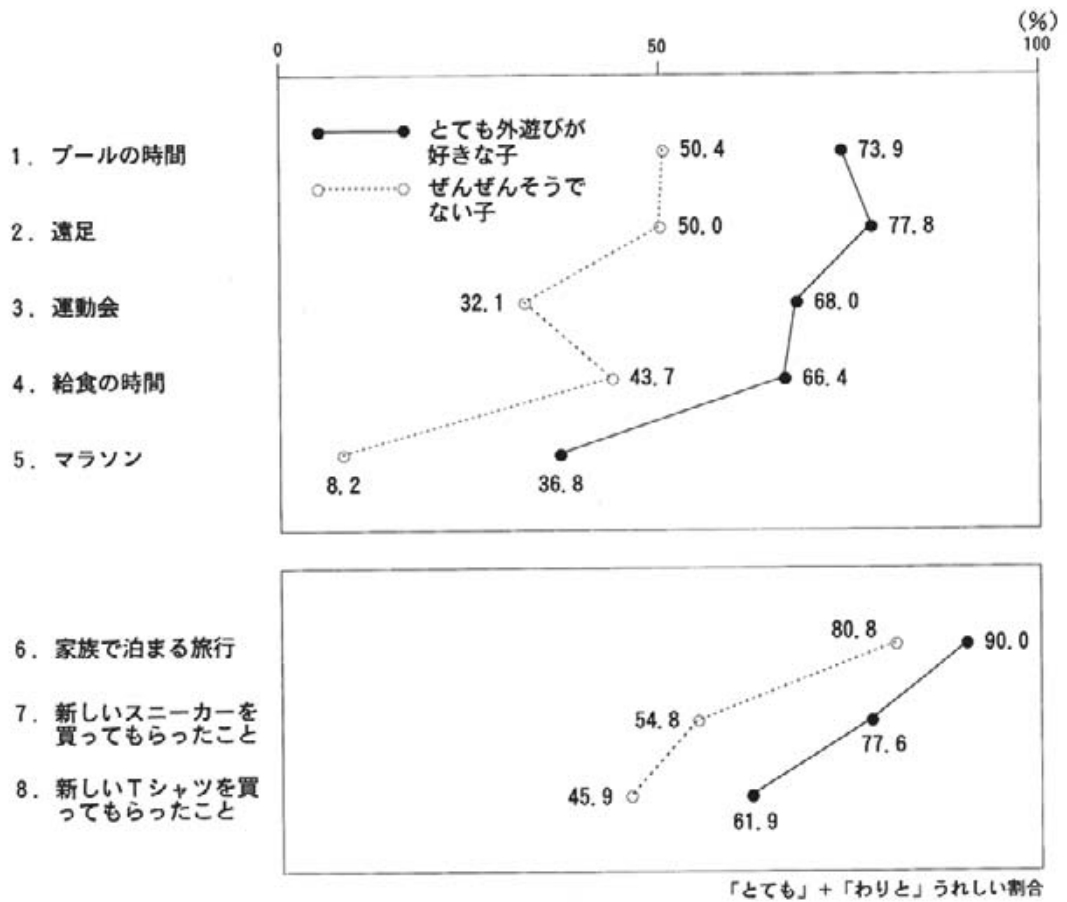


図31 幸せ感 × 外遊びが好き

